

大本山永平寺：七堂伽藍（山門）

山門は永平寺への公式の入り口であり、お寺の中心である七堂伽藍の中で最も古い。1749年に地元の大工たちによって伝統的な木材接合技術のみを使用して建設された。門を固定するために釘は1本も使用されなかった。永平寺の僧侶たちは、寺院に入る時と、修行が終了した時の二回だけしか門を通ることはない。

門の中には多聞天、増長天、持国天、広目天の四天王像が収められている。四天王は東西南北四方の守護者として知られており、仏教の宇宙観の中心に聳え立つ須弥山を取り巻く四大陸に住んでいるといわれている。四天王は通常、凶暴な表情で描かれ、鎧を身につけ、武器や神聖な物体を持っている。四天王は天邪鬼と呼ばれる悪霊を足元に押しつぶしている姿で表現され、邪悪な者を倒す力の象徴である。四天王に押しつぶされた後、悪霊達は悔い改め、提灯を捧げ持ち仏様の進む道を照らしたそうである。

参詣者には公開されていないが、山門の上層階には、釈迦牟尼仏の直弟子である500羅漢を納めた広間がある。月に2回、僧侶たちは急な階段を上って、広間で経を唱和する。江戸時代（1603～1867年）には、巡礼者は広間に入ることが許可されていた。巡礼者の旅が恙なく完了したことを示す古い落書きが今も見られる。